角田山を望む歴史ロマンが息づく郷土 ―西蒲区の歴史―

角田山と田園

菖蒲塚古墳と菖蒲の前

角田山麓の丘陵地に菖蒲塚古墳がある。その昔、平家追討で挙兵したが敗れて自害した源頼政の室、菖蒲の前が難を逃れて越後へ下り、この地に隠棲し葬られた塚であるという伝説がある。古墳の麓にある竹野町の古刹、金仙寺には「菖蒲前貞阿禅尼」の石塔がある。

実際にはこの古墳は伝説よりも古く、古墳時代前期（４世紀）に造られた。全長53mの前方後円墳で、西蒲の地にヤマト政権の勢力が及んだことを示す貴重な文化財である。菖蒲塚古墳は国の史跡に指定され、出土した勾玉や管玉、竜龍鏡はそれぞれ国や新潟県の文化財となっている。

「菖蒲前貞阿禅尼」の石塔（左端）金仙寺境内

天神山城跡と松岳山城跡

天神山城は標高234mの天神山にあり東西約500m、南北約200mの規模の山城である。築城時期は不明だが、南北朝時代以降は小国氏の支配する拠点であった。小国氏は後に上杉氏の有力な家臣となった。

上杉景勝に仕えた直江兼続の弟は、景勝の命で小国氏を継ぎ、大国実頼（小国を改姓）として城主となった。慶長３（1598）年、上杉氏の会津への国替えに実頼も付き従ったため、天神山城は廃城となった。

天神山の北東に位置する標高174mの松岳山（松ケ岳）には松岳山城があった。天神山城の支城の役割を果たしたとされる。この山にも、菖蒲の前が小国氏の庇護を受けたとの言い伝えが残されている。

天神山城址之碑（市史跡）

岩室温泉の賑わい

西蒲区の角田山と多宝山の麓の地域には、青龍寺や種月寺などの古刹があり古くから信仰と人々の往来で栄えてきた。江戸時代になり新潟町から赤塚（西区）を経て、稲島・岩室（西蒲区）を通り、弥彦にいたる北国街道が整備された。

岩室温泉は「霊雁の湯」とも呼ばれている。それは傷ついた雁が岩の間から湧き出た泉流で傷を癒している所から、源泉が見つかったという伝説にちなんでいる。慶長3（1598）年の検地帳には、「ゆのこし」の小字名もあり、すでに温泉が発見されていたとみられる。

岩室が温泉場として公認されたのは、正徳3（1713）年である。岩室の村の人々が石瀬代官所に役金を上納して、「温泉所」として認められたのである。江戸時代の中ごろには、37軒の湯組が「薬湯役」を納めていた。

こうして北国街道の宿場で弥彦神社にも近い岩室温泉は、旅人や参拝客で賑わうようになった。嘉永5（1852）年2月14日には、東北・越後・佐渡を遊歴中の吉田松陰も一泊している。

『いや彦紀行』より幕末の岩室温泉　新潟県立図書館所蔵

代官所と他所稼ぎ

西蒲区の中心を流れる西川は、長岡藩領であった新潟町や領内の村々と長岡城下を結ぶ舟の交通が盛んであった。村の支配と年貢米の収納のため、西川に沿った巻と曽根には、藩の代官所が置かれていた。17世紀中ごろから約250年間曽根組の要として置かれた曽根代官所の跡地には、当時をしのぶ樫（かし）の木が残り、市の指定文化財として地域で大切に守られている。

西蒲区の海岸部の集落は、江戸時代に他所に稼ぎに出る大工と毒消しを生み出した地として有名である。江戸時代後半、間瀬（まぜ）や五ヶ浜（ごかはま）からは毎年多くの他所稼ぎがあり、その大部分が大工であった。主に冬場に関東や福島に小グループで働きに出かけていた。優秀な大工が育ち「間瀬大工」や「五ヶ浜大工」と言われていた。

また、元治（げんじ）元（1864）年の『越後土産（初編）』には角海浜の毒消しが書かれており、江戸時代後半から女性による他所での毒消し売りが始まっている。毒消しは、明治以降も各村で製造され、広く他県に特産として知られるようになった。

曽根代官所跡　樫の木　曽根小学校（市天然記念物）

入徳館と新保正與

長岡藩が戊辰戦争の後贈られてきた米を、学校の建設に充てた「米百俵」の逸話は有名であるが、贈り主の三根山藩（明治３年峰岡藩と改称）も長岡藩同様、教育に熱心であった。

藩の学問所と武道の稽古場を明治維新後に併称して入徳（にゅうとく）館と称した。明治３（1870）年、江戸で学んだ曽根の国漢学者、新保正與（しんぼまさとも）を「大教授」として迎えた。明治４年の廃藩置県で藩校は廃止され、翌年の学制発布で私学峰岡校となったが、新保は与えられた官舎を寄宿舎に充て生徒と起居を共にして子弟を教え、「峰岡教員と村松巡査」とのちに言われたほど、多くの教員がこの地から育った。

入徳館の名は昭和16（1941）年に復活し、同53（1978）年まで小学校名として受け継がれ、現在は入徳館野外研修場となっている。

新保正與の碑　三根山藩址公園

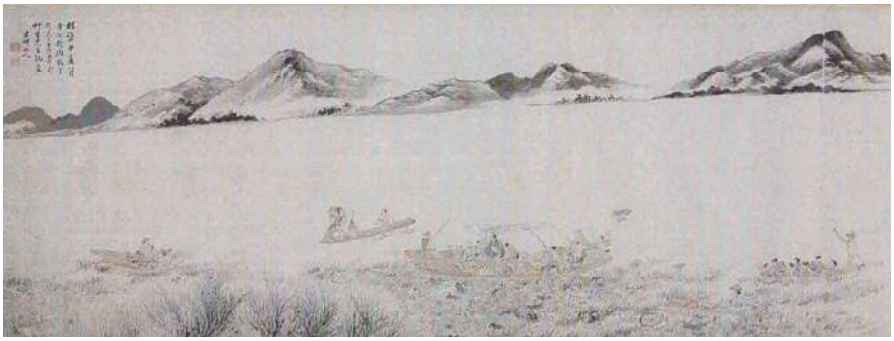
鎧潟の干拓と暮らし

鎧（よろい）潟はかつて西蒲原低地のほぼ中央に位置していた。鎧潟の名の由来は、源義家が黒鳥兵衛（くろとりひょうえ）を討伐に来たとき、泥の付いた鎧を洗ったことにちなむという伝説がある。

江戸時代の安永8（1779）年には面積は約1,500haだったが、新田開発により約600haとなり明治を迎えた。明治以降も開発が続き昭和30（1955）年には約250haとなっていた。

昭和34年、国営の鎧潟干拓事業が実施された。同41年６月に干陸（かんりく）式が行われた。翌年からは県営の圃場（ほじょう）整備が始まり、鎧潟の干拓により約235haの水田が新たに造成された。また、周辺の整備も進められ、西蒲区は県内有数の穀倉地帯となった。

干拓以前、鎧潟周辺の人々は多くの困難を味わった。一方、鎧潟でのコイ・フナ・ウナギ・エビなどの漁、ヒシの実やレンコンの収穫、冬場のカモ猟など、豊かな恵みと暮らしや文化を人々に与えてくれた。



飯島半耕画「鎧潟船遊びの画」　明治17（1884）年